

# 雲南市立三刀屋こども園（令和元・2年度 県指定）

## I 研究主題

生き生きと生活し、共に育ち合う幼児の育成  
～人と人とのあたたかい関わりを通して～

## II 研究の基盤

### 1 本園について

#### (1) 本園の実態

本園は、平成28年4月より認定こども園となり、5年目を迎えた。斐伊川の中流に位置し、町内5地区から50名の子どもたちが通園している。遠距離地区からのバス通園も実施している。

現在、幼稚園籍23名、保育所籍27名の計50名が生活している。年々保育所籍の子どもが増加の傾向にある。

園区には、保育所、小学校、中学校、県立高等学校や文化体育館、『如己愛人』『平和を』で名高い永井隆記念館等の各種教育施設等がある。園周辺には、県文化財指定の松本古墳や出雲大峰と尊宗される峯寺、また自然に恵まれた三刀屋川土手や河川敷など格好の園外保育の場になっている。

保護者の方の教育的関心は強く、もちつき大会などの様々な行事に保護者として参加するだけでなく、絵本の読み語りなどのボランティアスタッフとしても協力をいただいている。また、地域の方も、園の畑の耕しから野菜作りなど幅広く園活動に協力していただいている。町内各地区へ出かけ、高齢者の方との触れ合いも大事にしている。様々な人と関わり、人との触れ合いの中で育つ心情を大切にしている。

### 2 研究主題について

#### (1) 主題設定にあたって

本園の子どもたちは、明るく人なつっこく、誰とでも親しみをもって関わる子どもたちである。戸外でのびのびと体を動かして遊ぶことを好み、走ったり、ぶら下がったり、登ったりなど心も体も存分に解放し、楽しむ姿が見られる。一方、自ら進んで挑戦する態度や粘り強く遊びを追求しようとするたくましさに欠け、ふとしたことで泣いたり、保育者に寄りすがって甘えたりなど自立心の弱さも感じられる。

また、異年齢の友達に対して優しく思いやりをもって接する姿が見られる反面、同学年の友達同士の間には希薄さを感じられる。

保護者は、園・クラス運営を理解し、園行事やPTA活動にも協力的である。保護者同士の仲もよく、ネットワークの広さを感じている。一方で、子どもに対して愛情の注ぎ方が過干渉になりすぎてしまい、子どものやろうとする力をそいでしまっているところも見受けられる。

このような実態をふまえ、様々な環境を通して、子どもたちのもっている潜在的な力を存分に発揮し、自信をもって生き生きと生活できる子どもに育ててほしいと考える。

そのためには、まず子どものありのままの姿を認め、子どもの気持ちや考えに共感し、寄り添い、信頼関係を築くことが大切である。子どもとの信頼関係が成り立つと、子どもの情緒も安定し、心穏やかになり、「自分は大切にされている」「自分を大切にしよう」「友達やものも大切にしよう」と感じられるようになり、子どもの自己肯定感が高まり、自尊感情を育むことにつながる。と考える。

また、周りの大人（保育者や保護者等）の人権感覚を磨く取組や子どもの思いに寄り添う姿勢も子どもの自己肯定感を高めることにつながっていくと思われる。

自己肯定感が高まると、自信もつき、様々なことに挑戦する意欲がわき、常に安定した気持ちのバランスが保たれ、友達（人）のよさにも気づき、活動へ主体的に取り組むことができると考える。

心の安定によってこそ、誰（人）に対しても優しく、思いやりの気持ちをもって接することができると感じている。

これらのことを通して、子どもとの信頼関係を基盤に幼児理解に基づいた支援をし、人とのあたたかい関わりの中で、子どもの心を揺り動かすような豊かな経験の積み重ねをし、生き生きと生活してほしいと願い、本主題を設定した。

## （2）主題の受け止め

### ○「生き生きと生活する」とは

- ・自分の取り組みを認めてもらい、遊びの楽しさを感じたり、満足感をもったりする。
- ・安心して自分の思いや考えを言える。
- ・人・もの・ことに心を動かし、感動したことを自分なりに表現する。
- ・自分で考える、見つける、選ぶ、工夫するなど、子どもが主体性をもって活動する。

### ○「共に育ち合う」とは

- ・友達や保育者に親しみを感じ、共に生活することに喜びを感じる。
- ・友達に関心をもったり、関わりをもったりしながら遊びを広げたり、深めたりする。
- ・うれしい、楽しい、悲しいなど、様々な感情を相手と共有する。
- ・自分の思いを伝えたり、相手の思いを受け入れたりする。

### ○「人と人とのあたたかい関わり」とは

- ・身近な周りの人に大切にされているという安心感をもちながら自己を発揮し、意欲的に生活する。
- ・様々な気持ちを知り、相手の思いに立ち止まったり寄り添ったりし、相手の気持ちも大切にしようとする。
- ・地域の人との触れ合いを通して親しみをもち、人と関わる楽しさや人の役に立つ喜びを感じる。

## 3 研究の目標

- ◎人と人とのあたたかい関わりを通して、生き生きと生活し、共に育ち合うための援助のあり方を、実践を通して明らかにする。

## 4 研究仮説

- 子どもが表す思いや姿が受け入れられ、自分の力を発揮することができる援助を工夫すれば、自分が大切にされていることを実感し、主体的に生活することができるであろう。
- 保育者や保護者など、子どもたちと関わる大人が人権感覚を磨き、一人一人の思いに寄り添う援助を行えば、自己肯定感の高まりにつながるであろう。
- 自己肯定感が高まると、自信がつき、安定した気持ちのバランスが保たれ、誰に対しても優しく、思いやりの気持ちをもって関わることができるであろう。

## 5 研究の内容と方法

研究の内容	方法	具体的な手立て
<p><u>(1) 子どもの自己肯定感を高め、自尊感情を育む。</u></p> <p>○一人一人が「自分は大切にされている」と感じられる保育(生活)を創る。</p>	<p>① 子どものありのままの姿を受け入れ、子どもが興味をもったことややりたいことを、一緒に面白がったり、楽しんだりする保育者の姿勢を大切にする。</p> <p>② 一人一人がのびのびと自分を発揮し、自信の積み重ねをしていけるタイミングを捉える。(年齢や発達を考慮し、それにあった関わりを意識する。)</p> <p>③ 異年齢の自然な関わりや地域の人との関わりを大切にする。</p>	<p>(ア) 各年齢及び、一人一人の発達を捉え、子どもの実態にあった環境の構成や援助をする。(記録をとり、保育に生かす。)</p> <p>(イ) 教育課程、年間指導計画、週案などの見直しをし、各学年の発達を捉えたものを作成する。</p> <p>(ウ) 子どもたちの姿を肯定的に捉えられるように、子どもたちを語る時間を設ける。(職員会議、クラス会、休憩時間など)</p> <p>(エ) 生活の中での異年齢の子どもたちの自然な関わりや、様々な人(地域の人、高齢者さん、他園の友達など)とのあたたかい関わりを捉え、記録し、職員間で共有する。</p>
<p><u>(2) 家庭との連携・啓発</u></p> <p>○子どもを肯定的に捉え、楽しみながら子育てをしていけるようにアプローチをする。</p> <p>○人権意識の向上</p> <p>○人権教育の啓発・発信</p>	<p>① 子どもの成長や、園での子どもの具体的な姿を伝え、共に子育てを楽しみ、ヒントにつながるようにする。</p> <p>② 保育者や保護者の人権意識の向上を図る。</p>	<p>(ア) 保育公開日での“きりりカード”(子どもたちのよいところを見つけてもらう。)</p> <p>(イ) 誕生カード、我が子へのメッセージ</p> <p>(ウ) 保育公開、学級懇談会、個人面談の実施</p> <p>(エ) クラスだよりや連絡ノートを活用</p> <p>(オ) 職員研修会の実施</p> <p>(カ) 保護者研修会の実施</p> <p>(キ) アンケートの実施</p> <p>(ク) 人権教育 PTA 便りの発行</p>

## III 研究の成果と課題

### 1 研究の成果

#### (1) 「子どもの自己肯定感を高め、自尊感情を育む」について

- 日々の生活の中で子どもたちが表す姿を丁寧に捉えて、一人一人の子どものありのままの姿を受け入れていくことで、子どもが「どんな自分も受け入れてもらえる」という思いを感じることができると分かった。そのような取組の積み重ねで、子どもが保育者に信頼感をもち、より安心して自分の思いを表すことにつながったのではないかと考える。また、保育者は子どもたちが表す感情や態度、興味関心や困り感など、子どもたちの背景を探り、寄り添い、一緒に面白がったり楽しんだり、実現できるように支えたりする姿勢がよりよい信頼関係を築いていくことにつなが

ると気付いた。そして、子どもたちが、「自分は大切にされている」と実感していくことで、自信をもち、自尊感情を育むことになると分かった。

- ・自分の思いや考えを何でも受け止めて、一緒に楽しみ、支えてくれる保育者の存在は、子どもたちの心のよりどころとなり、ありのままの自分を出せる大切な環境であることが分かり、周りの大人の存在の大きさを感じた。そして、日々の生活の中で、自分（たち）なりのめあてに向かい取り組む姿の過程を大切にし、一人一人のやる気や努力など、その時、その瞬間を逃さずに認め価値付けていくことで、その子の自己肯定感を高めていくことにつながると改めて分かった。
- ・遊びの中やトラブル場面、集まりの場などで、友達の様々な思いや感情を伝え合えるように仲立ちをして、友達と様々な感情体験を共有できるようにしていくことが大切であった。そして、お互いの思いを知り合ったり、友達が自分のことを分かってくれと感じたりする経験が、自尊感情を高めていくことにつながると分かった。
- ・自己肯定感を高め、自尊感情を育んだ子どもたちは、自分への自信が増し、異年齢児との関わりの中で自分の存在意義を感じ、相手のよさに気付いたり、頑張りを認めたりするなど、より自信をもって生き生きと生活していけるということを実感することができた。

## (2) 「家庭との連携・啓発」について

- ・保育公開日や園の行事での子どもたちの姿を“きらりカード”（子どもたちのよいところを見つけてもらうカード）に記入してもらい、子どもたちの“きらり”を保護者、子ども、保育者で共有したことで、保護者や保育者は子どもを肯定的に捉え、育ちを実感することができた。また、子どもたちは様々な人に認められたり、価値付けられたりしたことが自信となり、安心して自分らしさを発揮することができ、自己肯定感の高まりに結び付いた。
- ・保護者は、講演会や参加型研修会を通して、まずは自分を肯定的に捉えることを、実践を通して学び、子どもへの肯定的な態度や言葉掛けをより意識していくことができるようになった。また自尊感情を育むことの大切さに気付くきっかけとなり、子育てに対する意識の変化が感じられ、研修を重ねることが大切であると感じた。
- ・全職員が『幼児期における人権教育』について研修を受け、人権教育の理解を深めていく中で、子どもたちにとって保育者自身が大きな環境のひとつということに気付かされ、一人一人の子どもを大切にする保育者の姿勢の重要性に改めて気付いた。
- ・日々保育をしている中で感じていたことを、全職員で共有し、思いや考えを伝え合ったり、園内研修で指導を受けたりすることは、保育者の人権感覚の向上につながると実感した。

## 2 成果を踏まえての課題

子どもたちは人と人との関わりの中で、自尊感情や自己肯定感を育んでいくことが、この研究に取り組む中で分かった。その中で、子どもたちを取り巻く大人の存在（保育者、保護者）が大きな環境となることに気づき、子どもたちを肯定的に捉え、関わっていくことの重要性を感じた。

今後は、新しい生活様式の中で、子どもたちの自己肯定感を育むための様々な人との関わり方（場のもち方、集まり方など）について探っていくことが重要であると考えている。

そして、人と人とのあたたかい関わりの中で、一人一人自らの心が動いて、自分の力を発揮し、自信を積み重ねていく環境の構成を更に追及すると共に、日々の保育を振り返り、保育者の人権感覚を高められるよう、研鑽を積んでいきたい。